

2018年1月9日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 前田 駿太
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 社交不安におけるコルチゾール反応の回復に認知的情報処理過程が及ぼす影響
論文題目（英文） Influence of cognitive information processing on cortisol recovery in social anxiety

公開審査会

実施年月日・時間 2017年12月5日・11:00-12:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・特任教授	井原 成男	文学修士	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	東北学院大学・准教授	金井 嘉宏	博士（臨床心理学）	北海道医療大学	臨床心理学

論文審査委員会は、前田駿太氏による博士学位論文「社交不安におけるコルチゾール反応の回復に認知的情報処理過程が及ぼす影響」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 コメント：中間報告会で指摘された事項、特に、結果に関する考察も真摯に、かつ丁寧に説明されていた。プレゼンテーションも概ね明瞭であった。

1.2 質問：研究3において、社交不安高群にPost-Event Processing (PEP) によるコルチゾール反応の回復を阻害する影響性がみられていないようであるが、絶対的な社交不安の高さが反応の回復に影響した可能性はないのか。

回答：先行研究に基づくと、一部そのような影響は生じ得ると考えられたが、データ分析の結果として社交不安の絶対的な高さの影響は実際にはみられなかった。

1.3 質問：研究3の社交不安高群の結果と、社交不安の程度が同等に高い参加者を対象とした研究5の結果は必ずしも一貫していないが、なぜこのような差異が得られたと考察しているのか。

回答：研究3と研究5の参加者の間で、慢性的なストレスへの曝露の程度によってコルチゾールの基礎値が異なっていた可能性を想定することができることから、結果に差異が生じたと考えている。

1.4 質問：研究2と研究5において、それぞれ認知的再評価とディストラクションをPEPと対比的な情報処理過程として位置づけているが、それは妥当であるのか。

回答：本研究においては、先行研究の知見を踏まえ、PEPに拮抗する方略であるという点で両者は共通しているという前提に立っていることから妥当であると考えている。

1.5 質問：研究3と研究5の思考サンプリング法で、PEPに関する内容を何度も想起させているが、この手続きによる測定誤差は生じないのか。

回答：当該の測定方法は、先行研究においても広く用いられている手続きを援用したものであり、測定値への大きな影響はないという前提のもとで使用した。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 研究2から研究5において、social anxiety composite scoreが社交不安の中の全般性サブタイプを意図して設定した指標であることを明示すること。そして、社交不安の中の全般性サブタイプを念頭において、交絡する可能性のある抑うつ程度を考慮していることを方法および考察部分において明示すること。

2.1.2 研究2において変数として認知的再評価を測定した理論的背景、および研究5においてディストラクション群をPEP群と比較した理由について、本研究の一連の流れがより整合的になるように加筆すること。

2.1.3 研究3および研究5において、一部逆の結果が得られたことについて、被験者の社交不安の重篤度の差異を可能な限り具体的なデータに基づいて示し、本研究ではより臨床群に近い被験者を対象にした研究5の結果の優位性を主張する立場にあることを明確にすること。また、仮説が明確に支持されなかった理由に関して、方法論上の問題に帰着するだけではなく、考察部分において、より人間心理の個人差に基づいた解釈の必要性に関して加筆すること。

2.1.4 研究3から研究5において、スピーチ課題実施時のスピーチ内容の影響性、およびイメージ性や想起視点などを含むPEPの内容的側面の影響性に関しても考察し、加筆すること。

2.1.5 研究4において、心拍知覚が不安の喚起につながるという本研究の前提を確認するために、心拍知覚と状態不安の関連性に関する分析を追加し、その結果を加筆すること。

2.1.6 研究4において、コルチゾールが認知的情報処理過程に及ぼす影響が明確に観察されなかったという結果を踏まえて、結果に影響を及ぼした可能性のある要因に関して今後検討する必要がある旨を積極的に加筆すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
 - 2.2.1 social anxiety composite scoreの使用および抑うつの影響の考慮は社交不安の全般性サブタイプを意図して行ったことについて、第3章から第6章に加筆した。
 - 2.2.2 認知的再評価およびディストラクションのそれぞれの情報処理過程を取り上げて、本研究において用いた意図について、第3章および第6章に加筆した。
 - 2.2.3 仮説と一致しない結果について、社交不安の重篤度、および課題内容の影響性の個人差に基づく考察を新たに行い、第4章および第6章に加筆した。
 - 2.2.4 スピーチ内容や従事した PEP の特徴が結果に影響した可能性を考察し、第4章から第6章に加筆した。
 - 2.2.5 心拍知覚と状態不安の関連性に関する分析結果を加筆し、理論的前提を一定程度裏づける結果が得られたことについて、第5章に加筆した。
 - 2.2.6 コルチゾールが認知的情報処理過程に及ぼす影響を左右する他の要因に関して今後検討することの必要性について、第5章に加筆した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、社交不安を示す者におけるコルチゾール反応の回復に関して、認知的情報処理過程の観点から記述を行うことを目的として明確に設定している。この目的は、社交不安に対する心理療法の介入効果の向上に寄与するという点からも、臨床心理学研究として妥当なものであると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究においては、心理社会的ストレスを実際に呈示し、それに対して生じる認知的情報処理過程がコルチゾール反応の回復に及ぼす影響、およびコルチゾール反応が認知的情報処理過程に及ぼす影響を直接的に検討している。したがって、本研究の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。なお、本博士学位論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（承認番号：2014-022；2015-183；2015-289；2016-003；2016-195；2016-276）を得ている。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、コルチゾール反応の回復しにくさが、社交場面に関する詳細な回顧である PEP によって予測できるという明確な結果としてまとめられている。これらの知見は、先行研究と照らし合わせても、社交不安におけるコルチゾール反応の回復の阻害メカニズムに関する実証的知見として妥当であると判断できる。
- 3.4 本論文の獨創性・新規性：本論文は、以下の点において獨創的である。
 - 3.4.1 先行研究においては、社交不安を示す者のコルチゾール反応性が検討されてきたが、この反応性に関する知見は一貫していなかった。この点に関して、本研究においては、研究間の測定時期の不一致を考慮した整理を行うことによって、回復しにくさに特徴があることを見出した点で獨創性を有すると考えられる。
 - 3.4.2 先行研究においては、社交不安を示す者におけるコルチゾール反応性の個人差は、主に先天的な遺伝子レベルの個人差から理解される傾向にあった。一方で、本研

究においては、変容可能性が高い、後天的な心理学的な変数に基づく理解を試み、一定の成果を得た点で、既存の枠組みを拡張する新規性を有すると考えられる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本研究においては、個人の PEP への従事という認知的情報処理過程の観点から、社交場面におけるコルチゾール反応の回復しにくさを説明できるという知見を提供している。このように、社交不安に対する臨床心理学的支援の有効性をさらに裏づける知見を提供している点において有意義であると考えられる。

3.5.2 本研究においては、コルチゾール反応が PEP への従事を促進することを示唆する知見をも同時に提供している。この知見は、コルチゾール反応の様相によっては臨床心理学的支援の効果が得られにくい可能性を示唆するものであり、臨床心理学的支援の際の生物学的側面のアセスメントの重要性を裏づけるものである。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 人間社会においては、他者との相互作用はきわめて重要な営みであり、この営みに影響を及ぼしうる社交不安の維持メカニズムの解明は人間科学が取り組むべき重要なテーマのひとつであると考えられる。本研究は、社交不安の維持と強い関連性をもつ、コルチゾール反応の回復しにくさのメカニズムを実証的に検討するものであり、この点において人間科学に対する寄与があるといえる。

3.6.2 本研究では、社交不安の維持に寄与する生物学的基盤として、副腎皮質ホルモンのひとつであるコルチゾールに着目している。このような内分泌的指標を用いて得られた本研究の知見は、医学や生物学をはじめとした他の学問領域との相互理解を可能とするものであり、人間科学の発展にも資すると考えられる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・前田 駿太・増田 悠斗・佐藤 友哉・嶋田 洋徳：2016 社交不安症における心理的ストレスナーに対するコルチゾール反応：メタ分析による検討。不安症研究（日本不安症学会），8巻1号，46-57頁。

・Maeda, S., Shimada, H., Sato, T., Tashiro, K., & Tanaka, Y. : 2017 Translation and initial validation of the Japanese version of the self-beliefs related to social anxiety scale. *Psychological Reports* (SAGE Publications), 120巻2号, 305-318頁。

・Maeda, S., Sato, T., Shimada, H., & Tsumura, H. : 2017 Post-event processing predicts impaired cortisol recovery following social stressor: The moderating role of social anxiety. *Frontiers in Psychology* (Frontiers Media), 8巻, 論文番号1919。

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上